

六年一組 河野 裕介

ぼくはこの朝、馬に乗って山を一周散歩しました。最初は馬を進ませたり、とめた受けましたりするレッスンを



【タ刊デシリー「光の子」

令和四年四月二十二日

不思議な散歩

六年二組 久保 心羽

霜柱がたって、馬がふもと、
 「シャリッ」という音がして、
 持ち良かったです。さうに進むと、
 平らな所にでて、そこからはのん
 びり行きましました。慣れなかつた馬
 のゆれも、三十分ほど乗った馬
 と慣れてきて、リラックスできる
 ようになりました。散歩が終わり、
 て、馬からおりると、乗らないで、
 時の感覚がなくなかぬけないで、
 足がブルブルしていました。
 とっても楽しくて、またやりた
 くなりしました。馬ともしっかり仲良
 なりたいです。

【タ刊テイリー『光の子』
 令和四年四月二十二日】

命のたんじょう
 六年一組 高木 蓮斗
 小さな命
 ぼく達には一つしかないそれは命だ
 お父さんお母さんからもらった
 大切な命
 そんなぼくに妹ができた

【タ刊デイリー『光の子』
令和四年四月二十二日】

不思議な散歩
六年二組 久保 心羽

今日、私は久しぶりに家の周りを散歩しました。

普段あまり一人で歩くことはないのでとても不思議な感じでした。

すると、一匹の猫と目が合いました。びっくりしました。私も猫も。

そしたら、いきなり私の方に向かって全速力で走ってきました。


まっただけど猫は、私の足元で５秒ほど止まり、また走ってどこかに去っていききました。本当に怖かったです。

いつもは猫や鳥などを見ると自分から行って、逃げられるけど今日は違います。

物の気持ちに追われる動物の気持ちはよく分かりました。

だれでも、みんなさいます。

あのころに一回だけ会ったことのある猫だったのです。そのころ、写真撮っていたので、家に帰ったとき、



え、確認してみました。
 や、はい、あのころの猫でした。
 ん、だかとても運命を感じました。
 今日。はとも不思議な体験をし
 ました。またあの猫に会いたいで
 す。

【タ刊デシリー「光の子」】

令和四年四月二十二日

あしがれの偉人

いぼくは、六年三組佐藤研
さんです。そのあこがれている偉人が

伊藤博文さんは、明治生まれの政治家です。彼は、初代内閣総理大臣になった。後、三度も総理大臣になりました。

伊藤博文さんは、何度か総理になつたことでは、きつぱ光を浴びたことだが、ぼくが最もすごいと思

う部分があります。
藤それは、日本最年少総理大臣が
す。博文さん、その記録は破られて

いいと思う。いや、
身分と、部分から
社、部、分、が、
会、当、時、の、あ、
で、の、あ、り、
ま、本、ま、他、
ま、れ、は、す、に、
た、も、な、
身、も、な、
分、の、ぜ、す、
を、す、か、こ、
か、こ、い、

か子え
つ武にる
た土な
けのる
ど、中幸
で、運か
総はが
理、あ
大身
臣分
とが
い非
う常
日、中
本低間

の、と
よ最
う後
に思
にま
した
。ぼ
くも
、伊
藤博
文さ
んが

低くても、かんはれるような、メ
ンタルが強くて、あきらめないよ
うな大人になりたいです。

【タ刊デイリー】『光の子』

令和四年四月二十二日

タヤケ
三
口
京

青色　水色　オレンジ
ピンク　むらさき
タがたの空は　絵に描いたよう
同　色は二度とない

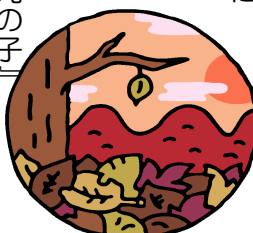
毎日 毎日 ちがう色
うれしいこと 楽しいこと

い私辛
ろのし
ん気こ
な分と
気色も
分が毎悲
があ日し
あっちし
ってがこ
ていうと
い
)

自分の色で

かかやきたい
明日はどん

明日は
空がど
んな
タヤけ
るかな



【タ刊デイリー『光の子』
令和四年四月二十二日】

令和四年四月二十二日】

赤ちゃん

六年三組 古川 佳

おねえちゃんのおきやんの赤ちゃん

泣いてる
元気がない
可愛らしい
赤ちゃん

すとお
やてら
すもろ
や気に
ね持い
てちれ
しよて
まさは
っそけ
たうた

顔音をたてても
物をさわっても
ぜんぜんおきない

とても気持ちよさそう
赤ちゃんの手に
指を近づけた

きゅーとにぎつてくれた
とてもあったかい
ちっちゃい手



【タ刊デイリー】『光の子』

令和四年五月十四日